



## 凝縮された2年間の経験 グローバルな看護を次世代に伝え続けていく

山崎 智恵さん 富山福祉短期大学看護学科助教  
Chie Yamazaki

最初の任地は、戦火に包まれる直前のシリアだった。

情勢悪化により一時帰国、東日本大震災の避難所で働き、そして新たな任地モロッコへ。

戦争、自然災害、貧困……世界の課題を目の当たりにしてきたからこそ、伝えられるものがある。

### マタニティマークの シリア版を作成

日本で使われているものと同じデザイン。でもお母さんは、イスラム女性が髪を隠すため身につけるヒジャーブ姿。山崎さんが青年海外協力隊時代に作成したマタニティマークだ。

「母子保健を広め、妊婦さんにもっと



健診を受けてもらおう—そんな思いで同僚と一緒に作り、保健センターをはじめ女性がよく通う薬局や美容院などにも貼ってもらいました。マタニティマークの普及は、シリアはもちろんのことアラブ諸国では初めての試みでしたが、今では他の国にも広まっています」

### シリアからモロッコへ 派遣国変更を乗り越えて

高校生の頃から看護師として海外で働きたいと思っていた山崎さん。大学では国際看護学を学び、ミャンマーでの研修を通じて協力隊への参加を考えるようになった。卒業後、東京都の文京区役所で保健師として働いたが思いが

募り、休職して協力隊に参加することを決意した。

2010年6月にシリアへ派遣。任地のマンベジ郡はイスラム色の濃い保守的な地域で、女性の識字率は5割以下、家からあまり出ずに生活する女性も多い。保健センターに配属された山崎さんは、妊産婦や乳児にもっと地域医療を利用するよう呼びかける活動に取り組んだ。

出産回数の多さや間隔の短さ、若年や高齢での出産……課題は山積だが、まずは保健センターで妊産婦健診を受けてもらうこと。そこからお産や産後の経過まで、継続的なケアに繋げるシステムを作る。そんな中から出てきたのがマタニティマークを作るアイデアだった。

「残念なことに、シリアでは10ヵ月し



今や学生はアジア各国から集まってくる。日本、そして世界に羽ばたく看護師の卵とともに。



授業では、本物の赤ちゃんと同じ重さの人形を使い、抱っこや沐浴の仕方、オムツ交換といった体験学習を通じて、実践力を身につけさせていく。

か活動できませんでした。国内情勢が悪化し、やむなく一時帰国。その後も情勢は変わらず、シリアに戻ることができなくなってしまったのです」

2011年4月に一時帰国し、再赴任か振替派遣となるか調整がなされている間、東日本大震災の避難所となっていた福島県二本松市にあるJICA青年海外協力隊訓練所にて、ボランティアとして活動した。

「2ヵ月間、避難者の健康管理を担当しました。避難所生活が長期化し、不眠やうつ、アルコール依存などの問題も発生し、メンタル面のケアにも力を尽くしました」

4カ月後、派遣



## 山崎さんへの エール!

富山福祉短期大学  
看護学科  
学科長、教授  
北濱 まさみさん

